





逃した魚

中原 一也

目次

C O N T E N T S

逃した魚

あとがき

水面に映る午後の光。ゆるりと流れる川。垂らされた釣り糸。晴れ渡った初夏の空。

川縁に座ってそれらを見ていると、このまま隠居してどこか遠い田舎^{いなか}で自給自足の暮らしをしたくなる。忙しい日常から解放され、日がな一日近くの沢^{やまめ}で山女を相手にしているのが理想だ。家の庭の畑で軍手と麦わら帽子をつけた妻が、野菜を育てているともっといい。

市ヶ谷^{いちがやひさよし}久義、四十一歳。

グレーのスーツを着たおっさんが釣り糸を垂らしながらぼんやりとしている姿は、まさにハローワーク帰りの無職の男だ。失業保険も打ち切りになり、貯金も底をついてこれからどうしようかと途方に暮れているように見える。覇気のなさがそうさせるのか、生きる気力を失っているようにさえ感じられた。

しかし、これでも一応司法書士の資格を持っており、事務所も構えている『先生』だ。若い頃から物欲がないため金は貯^たまる一方で、生活の不安など抱えたことは一度もない。そんな毎日を送っているからか、競争心もなく、もっと稼ぎたいという気持ちも持ったことがなかった。

年齢的には立派な中年だが、細身だからか市ヶ谷には脂ぎったところがまったくなく、大量の汗を掻くようなこともあまりない。のんびりとした性格で、一言で言うなら地味。冴^さえないおっさんという自覚があるため無駄にお洒落^{しゃれ}もせず、金もかか

らないお得な男と言っていていいだろう。

また、顔立ちはごく一般的な部類に属し、飛び抜けて美形でもなければ不細工でもなく、日本人らしいすつきりとした印象だ。

強いて特徴を言うなら、唇の下にホクロがあるくらいだろうか。

浮気をするようなタイプでもなく、結婚相手としてはかなり条件のいい物件だと言えるが、なぜか女性には縁がなかった。

それは、市ヶ谷が女性とのつき合いに積極的でないのも大いに関係あるだろう。

しかし、四十を過ぎたばかりで山奥で暮らす仙人のようになってしまったのは、取り囲む環境もかなり影響している。

通常、司法書士は業務上関連の深い法務局の近くに事務所を構えることが多く、司法書士同士の交流もよくしている。七十を過ぎても現役で働いている司法書士はめずらしくなく、都心から離れたのんびりした場所がらなのか、市ヶ谷の周りには高齢の先生が集まっている。

戦争経験者もいるような中に長いこと身を置いていれば、もともとの年寄り臭い性格に磨きがかかるのも仕方がない。

囲碁や将棋の相手をするのも少なくなく、すっかり馴染んでしまっている。

「ふあああ~~~~」

大きなあくびを一つした市ヶ谷は、反応のない釣り竿ざおを左手に持ち替えて、また水面をぼんやりと眺めた。

もうこのまま今日の仕事を切り上げてしまいたいなんて、働

き盛りの四十一歳が思ってはいけなことを考えていると、そんな市ヶ谷を若い女性が呼ぶ。

「市ヶ谷先生え」

事務所の方から駆けてくるのは、司法書士の仕事を補佐する『補助者』として雇っている女性だった。雇い入れて五年になるが、市ヶ谷のことをよく理解しており、補助者としての仕事以外にも細かなことに気がつくいい娘である。しかもものんびりした性格で、市ヶ谷とは相性がいい。

「先生、やっぱりここにいらしたんですね」

「あー、佐々木さん。どうしたの？」

「どうしたのって……戻ってこれないから、呼びに来たんです。何か釣れました？」

バケツの中を覗かれるが、そこには水が入っているだけで魚の姿はなかった。天気の良い日の昼間に釣り糸を垂れても、そうそう魚が喰いつくはずがない。

わかつているが、何も躍起になって釣ってやろうとも思っていないため、気にしない。

釣り糸を垂れているだけでいいのだ。

「武山先生がみえてますよ」

「武山先生が？ またサボりに来たのかなあ」

「やっぱり忘れてた。ほら、今日はお孫さんを連れてこられるって……」

「ああ。そうだったそうだった」

市ヶ谷はのらりくらりと釣り糸を引き上げて、片づけを始めた。ゴム管から浮きを引き抜いて道具箱に入れ、また次に使え

るよう針やサルカンなども全部きちんとうしまう。

実は、長いこと市ヶ谷の補助者として働いてくれた彼女が寿退社することになり、新しい補助者を探していたのだ。それを聞いた司法書士の武山に、ちようど孫が仕事を探しているところなので雇ってくれと言われて引き受けた。

しかし、この孫というのがなかなかのスペックの持ち主で、先に履歴書を見せてもらった市ヶ谷は、自分のようにのんびり仕事をしている男の下で仕事をさせていいものか悩んだ。

今年三十一歳になる武山の孫の織田隆は、なんと弁護士資格を持つており、大手法律事務所に勤めていたというのだ。何かのトラブルがあったのか、急に事務所を辞めることになったらしいのだが、常識的に考えるなら事務所を辞めても同じ業界での転職を狙うのが普通だろう。

しかし、資格を剥奪されたわけでもないのに、弁護士の仕事は二度としないと言っているというのだから驚きだ。

単にその仕事に愛想が尽きたのか、それとも弁護士の世界では生きていけなくなったのか。

長年平和な毎日を送ってきた市ヶ谷にとつては、たったこれだけの謎でもサスペンスドラマの殺人事件並に一大事なのだ。

「すごいですね、弁護士の先生が補助者として働くなんて」「うーん。でも僕は持てあましそうな気がするんだ」

「弁護士の資格を持つてるんですよ。私なんかより、きつと先生のお役に立ちます」

「何を言ってるんだい。佐々木さんはとても優秀だよ。本当はずっと働いて欲しいくらいなんだから。あーあ、佐々木さん

みたいに優しい人だといいただけだなあ」

ぼんやりと零した言葉に、彼女はにつこりと笑った。

正直者の市ヶ谷はお世辞を言うことはなく、本音しか口に出ない。正直すぎて、ときどきいらぬことを言ってしまうこともあるが、それだけに市ヶ谷の言葉には嘘がないのも事実だった。だからこそ、彼女には今の溜め息が嬉しかったのだろう。

「武山先生のお孫さんですから、きっと大丈夫ですよ」

彼女も市ヶ谷の下で仕事をしてきたせい、のんびりとした口調で言い、散歩をする歩調でのらりくらりと歩いた。

二人とも、人を待たせているとは思えない。

「それより先生。事務所の冷蔵庫の中にサシ虫を入れるのはやめてください」

「え。駄目かなあ」

「新しい方に怒られますよ」

「だって、時間ができた時に釣りたいじゃないか」

「先生は休み時間が終わっても、お戻りにならないから。ちゃんと時間通りに帰ってきてくださるなら、入れていても怒られないかもしれません」

「うん、わかったよ」

まるで小学生の子供がお母さんに注意されているかのよう、市ヶ谷は素直に頷いた。しかし、約束を実行できずにまた注意されてしまうこともしばしばだ。

「あゝあ。佐々木さんとももうお別れかあ。寂しいなあ」

「私もです、先生」

「あ。でも幸せになるんだから、寂しがっちゃ駄目だなあ。」

たくさんたくさん幸せにしてもらうんだよ」

「はい、ありがとうございます」

彼女は、とても幸せそうに笑った。

五分ほど歩いていると、市ヶ谷の事務所が入った建物が見えてくる。

市ヶ谷の事務所は、団地によく見られる横長の集合住宅のよ
うな形をしたコンクリート二階建ての二階部分にあった。全部
で十二の部屋があるが、すべてそれぞれ違う司法書士の事務所
で埋め尽くされている。

今は随分と減ったが、タコ部屋のように一つの建物の中にず
らりと司法書士の事務所が並んでいる形態は、昔はよく見られ
た。近くに似たような建物があるが、そちらは土地家屋調査士
の事務所でいっぱいだ。

今でも昔ながらの光景が見られるのは、土地がらだろう。

都心に行くまでそう距離はないが、東京とは思えないほど自
然も多く、昭和の匂いにおのするものがあちらこちらで見られる。
四季を堪能できるこの場所は、市ヶ谷のお気に入りだ。

事務所の入っている建物に着くと、市ヶ谷は一階の集合ポス
トで郵便物を確認し、古びた階段を上っていった。

事務所の中では、今年七十五歳になる武山が待っている。

「市ヶ谷先生。釣りですか？」

「すみません。天気がよかったから少し、と思って。そうし
たら、つい約束を忘れてしまつて……」

「あゝ、いいんじゃないよ。わしもどうせ暇じゃったから」

武山は、ソファアに腰を下ろして茶を飲んでいた。スーツ姿

はどこか品があり、老紳士という言葉がとても似合っている。しかし、意外にお茶目なところもあるのだ。

そして市ヶ谷は、その向こうに座っている若いスーツ姿の男性に目をとめた。

「はじめまして。織田隆と申します。先日履歴書をご覧いただいたそうで、お忙しい中ありがとうございますでした」

織田はソファから立ち上がると、深々と頭を下げた。弁護士というだけあり背筋はピンと伸び、エリートの風格を身に纏まとっている。

しかも、かなりの男前で若手俳優でも来たのではないかと思つたほどだ。

地味で素朴な市ヶ谷と違い、生き馬の目を抜く場所で闘つてきたような精悍せいかんさも持ち合わせていた。

三つ揃ぞろいのスーツがこれほど似合う男を見たのは、久し振りだ。

ヘアスタイルは手櫛てぐしで撫なでつけたラフなオールバックで、上背もあるが肩幅も広く、厚い胸板はその下にある鍛え上げられた肉体を連想させる。一見理知的だが、ひとたびスーツを脱ぎ捨てると動物的な一面を持っていそうな、滲にじみ出る色香もあった。

スーツの下に隠されている、男の魅力。もし、佐々木が結婚を間近に控えて婚約者一筋でなければ、恋に落ちていたかもしれない。

同じ男である市ヶ谷ですら、その男ぶりに圧倒されているのだ。

**この続きは製品版で
お楽しみください。**



<http://gyutto.me/>